

リスボン大地震一七五五年―近代ヨーロッパの社会的震撼 永治日出雄

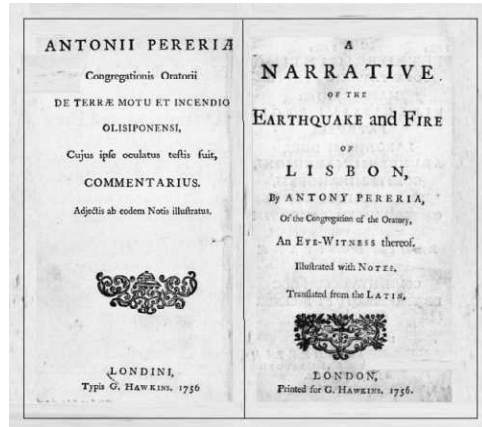
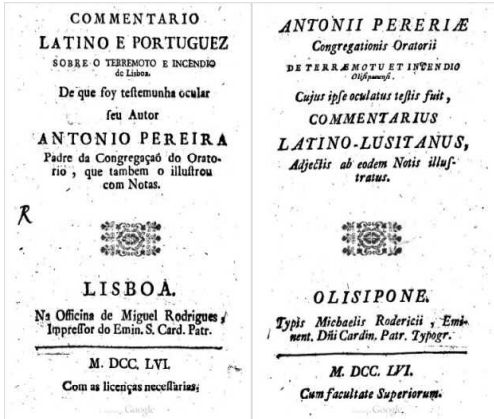
第一輯 リスボン大地震の総覧と諸相

論文一ノ一

学僧ペレイラ・ド・ファイゲイレドの

要録『リスボン地震・大火奉告』

ファイゲイレド著『リスボン地震・奉告』は地震発生翌年まずラテン語、ポルトガル語対訳版がリスボンで、さらにラテン語、英語対訳版がロンドンで刊行された。著者は当代きって学僧であって、国務尚書ボンバルの参与の地位にあった。



リスボン大地震に関する重要な史料のひとつ、神父アントニオ・ペレイラ・ド・フィゲイレドによる『リスボン地震・火災奉告』は、一七五六年まずラテン語で印行された。①フィゲイレドが所属するオラトリオ会は、王権の中枢ボンバル公爵と、リスボン総大司教カマラー・ダタライアを支援する有力な宗派であつて、彼自身も国務尚書の参与を務めた。ラテン語で執筆された理由のひとつは、ポルトガル宮廷のなかば公文書として、ローマ教皇へ報告するためであろう。この捧答には国王ジョゼ一世の実弟ペドロ親王や同じく王族である高等法院院長ラフオエス公爵への献辞が付せられる。まもなく同書のポルトガル語版がリスボンで、またラテン語⇨英語の対訳版がロンドンで出版された。本稿ではこれら羅葡対訳版と羅英対訳版に依拠して全文の邦訳を試みる。なお、原典に章節の区切りはないが、論述の便宜上ここでは三つの部分に分けて提示したい。

フィゲイレド著『リスボン地震・火災奉告』（その一）

人口稠密な王都に壊滅と大火を惹き起した有名な地震、記録して後世に伝えべき重要な事件について若干の証言を記述したい。かくも怖ろしい破局をこの国で古来見もせず、聞きもせず、神は多年にわたる罪過をただ一日で処罰するよう決意されたと思わる。

① T. D. Kendrick, *The Lisbon Earthquake*, New York, 1955, pp.90-92.

すなわち一七五五年十一月一日、天気晴朗にして海原静穏な午前十時頃、地底が轟くように、凄まじい爆音が聞え、リスボン一帯の全域で突如震動が始まり、僅かな間隔を挟んで数度繰り返した。大地が上へ下へと動き、船のように東から西へ、北から南へと揺れる。最初はさして強烈でなかった震動が、次第に激しくなつて床と天井が割れ、屋根が崩れ、轟音をなして拱門が倒れ、ついには高塔と障壁もこちらでは亀裂し、あちらでは倒壊し始めた。荒墟からはさまざま粉塵の巨大な雲が立ち昇り、被災した首都が急に暗闇で包まれる。しかし、住民の戦慄と動顛の頭上で、その雲は徐々に消え、ふたたび太陽が照りつけた。あちこちで震動が揺れる建物を貫き、大小さまざまな鐘が鳴り響いた。ほかでは風に吹かれる羽毛のように、屋根から屋根へ瓦が飛ぶ。図書館では棚から書物が転げ落ち、椅子、机、道具など家庭の調度は勿論折れ毀れた。

その間にリスボンの住民は突然の異常な災厄に驚愕し、一方では自宅から教会へ駆込み、他方では教会から自宅へ脱出した。ある者は妻の死去を嘆き、他の者は見失った子どもを捜す。哀願の手を天にさし伸べて彼らの大半は、みな聖母マリアに呼びかけ、わが身の罪過を唾棄すると誓った。彼らは聖職者にも告解をなし、激怒した神に赦免を乞う。そして、恐怖に震えつつ、悲痛な叫びを四圍に反響させながら、あちらこちらと走りまわる。審判の日が迫つたと思ふ者も、いまやその日が来たと呼ぶ者もある。だれもが怖れたのは、大地が広い空洞を開き、住民もろとも都市リスボンを呑み込むことである。なぜなら、障壁が脈打つように揺れ、震える大地が恐るべき轟音を発し、王都が揺れ動くだけでなく、基底から引き裂かれたからである。

こうした地震の直後に住居、街路、小道には死体が散在した。拱門の倒壊によって頭脳が破裂した者も、障壁の倒壊で押し碎かれた者もいるが、それらの大半は合掌や石材の山に埋れて、瓦礫の重みで重圧や窒息に至つた。若干は四日後あるいは六日後に救出され、さらに驚くほどながく耐え、九日後に救われた人たち

もいる。彼らのひとりには十五歳の娘、ディオニシア・ローザ・マリアであって、無傷で生存していた。建物が揺れ始めたとき、この娘は聖アントニオの画像を即座に抱いたが、その直後家屋が崩れ、食物なしに九日間荒墟に生埋めとなった。遺体に囲まれた状況で彼女が発見され、無傷の姿で聖なる司教座教会および国王諮問会議の高位聖職者、サン・バイヨ様のもとへ移された。この方こそ出自と徳操によって名高く、市民を瓦礫から救出し、即死を防いだ功によりリスボンから篤く表彰された人、少数の側近とともに二百四十名を埋葬した博愛と慈悲の人である。とはいえ、こうしたキリスト教徒の責務においてポルトガル貴族のなかでもっとも傑出する人物は、国王の従弟にしてラフォエンス公爵の弟、ドン・ジョアン・ブラガンサである。人々の命を救うため頻繁に徒歩で全市を巡察し、死者の埋葬と生ける者の救助に専念して、この方は気高くも自己の生命を危険に晒し、永遠の栄光に輝くのである。ほかにも非常に多くの住民が瓦礫のなかで死に、町中を牛や従僕によって運ばれた。不運にも数名は自宅で石造りの階段が頭部に落ちて死亡した。

しかし、最大の破壊に至ったのは幾多の教会で、当日の儀式のためとくに混み合っていた。建物や位置や瓦礫の如何によって、ここでは五十名、かしこでは百名、こちらでは多数、あちらでは少数と人々が死んだ。(原註一) 敬虔な信者に対する痛烈の衝撃は、神壇に祀られたさまざまな聖像が、無惨にも打ち割られたり、瓦礫に埋もれたり、火焰で燃えたことである。最大の衝撃を与えたのは、十字架を背負うキリストの絵図である。これを蔵する慈恵教会はアウグステイヌス会に属し、ポルトガル国王、貴族階級、国民各層の特別な帰依によって名高いので、毎年四旬節には市内を練り歩く行列にその絵図が掲げられる。地震発生の八日後懸命の探索を経てそれが発見され、荒墟から取り出された。こうした采配をされた方々は、前述のドン・ジョアン・ブラガンサ、オリオラ侯爵Ⅱアルビト男爵ジョゼ・アントニオ・フランシスコ・ロボ、サン・ルレ

ンソ侯爵ジョアン・アンズベルと・デ・ノロンハ、リベイラ侯爵の子息ヴァスコ・カマラである。けれども、思うだに心外であるのは、聖餐用のパンを納めた聖器があるいは火災で焼け、あるいは瓦礫に埋もれて、必死の捜索によっても発見されないことである。

聖職者と修道女も不幸を免れなかった。いわゆる嚴修派、フランシスコ会では二一名が死亡し、そこにはともに道心堅固なジョゼ・デ・アボカリプス・リンハレス神父とジョゼ・デ・サン・ガテル・ラマチル神父が含まれる。第三フランシスコ会三名。カルメル会十五名のなかには、リキアノ・サン・アルベルと神父とアントニオ・ダ・クンは神父がおられ、前者はリスボンにおける元管区長、後者はやはり元修道院長であった。三位一体会十四名。聖ヨハネ・エヴァンゲリストの聖堂参事委員七名。アウグステイヌス会五名。ポルトガル・ドミニコ会三名。アイルランド・ドミニコ会四名。イエズス会三名と他の会数名。オラトリオ会四名で、そこに含まれるフィリッペは白髪まじりの頭と純朴な徳操で尊敬され、聖俗いずれの文典にも精通し、その雄弁、暖かな人間愛、とりわけ聖母マリアへの信仰によって著名であった。受胎告知尼僧院に勤めるドミニコ会修道女は五名死亡した。サン・サヴィール修道院十四名。サンタ・アンヌ尼僧院では五名が圧死し、カルヴァリ修道院では二二名、サンタ・クララ尼僧院では六三名が逝去した。アウグステイヌス会とコンセプシオン会の数名をこれに加える必要がある。(原註二)

ポルトガルにおける報告や記録によれば、もっとも凄まじい震動は約七分間持続した。さらにそのあと短い期間を挟んで四度比較的激しい地震があった。第一の震動は前述のとおり十一月一日十一時に、第二は同月八日未明に、第三も十二月十一日未明に、そして第四は同月二一日未明に発生した。しかも、最近の六ヵ月にも軽度な地震が数回あり、最初から最後までを合計すれば、頻繁な度数、二五〇に及ぶとも言われる。

こうした結果大抵の公共建造物と大半の個人住宅の大半が倒壊した。ところによっては大地に亀裂が生じたが、狭い隙間のため危険はない。(原註三) なお、ほかの地点では井戸水が濁った色となり、悪臭を放った。

(原註一) 昨年コインブラでレヴィス・セッコ・フェレイルによって印行されたポルトガル語書簡で、ジョセフ・オリヴェイラが語る事柄を、私たちは意に介さない。オラトリオ会の聖霊教会で二百人が死亡したと、彼は言うのである。最後までそこに留まった私たちの同志は、実際に死んだ人数はその数値の四分の一であると確言する。

(原註二) ここに誌す聖職者と修道女の数値は、各教団の生存者から得たもので、これと異なる算定をした人は信用できない。

(原註三) コインブラからの書簡で語った人物は歴史家ではなく、むしろ詩人のように思われる。大地が巨大な亀裂を生じ、海底が現れた、と彼は述べる。①

① Antonii Pereira, *De Terramoto et Incendio Olisiponsi, Cujus ipse oculus testis fuit, Commentarius*

Latino-Lusitanus, Antonio Pereira. *Commentario Latino e Portuguez sobre o sobre o Terremoto e Incendio de Lisboa*, Lisboa 1761. pp.1-9.

Antonii Pereira, *De Terramoto et Incendio Olisiponsi, Cujus ipse oculus testis fuit, Commentarius*. Londini, 1756.

Antony Pereira, *A Narrative of the Earthquake and Fire of Lisbon, translated from the Latin*. London, 1756. pp.3-9.

この記録の執筆者フィゲイレドは十八世紀後半のポルトガルにおいて、とくに著名な聖職者のひとりであった。一七二五年に生まれた彼は、ヴィラ・ヴィンサ・コレジオでラテン語と音楽を学ぶ。その後コインブラのサンタ・クルーズ修道院に入り、一七四四年からはリスボンのオラトリオ会聖霊修道院で哲学と神学を修めた。かねてオラトリオ会はポルトガルにおける学芸の革新を目指し、こうした組織のなかでやがて彼は教授としてラテン語、修辞学、神学を教えるに至る。①

フィゲイレドが所属したオラトリオ会について、『ボンバルー啓蒙の逆説』の著者ケニス・マックスウェルはつぎのように述べる。「聖フィリッペ・デ・ネリによって創立された修道会、オラトリオ会の聖職者はヨーロッパの他のカトリック教国におけると同様に、ポルトガルでも科学的な実験の導入に指導的な役割を果し、教育の規範に関する論争で、イエズ会士に抗して最前線に立った。また、彼らは自然科学を熱烈に推奨し、フランシス・ベーコン、デカルト、ガッサンディ、ロック、アントニオ・ジェノヴェシなどの思想を紹介した。」②

一七五三年に上梓されたフィゲイレド『ラテン語文法教程』は、斬新で簡明な内容によって世評を高め、イエズ会等の反発にもかかわらず、ポルトガルとブラジルにおいてすべての公立学校でやがて採択されるにいたる。

① Antonio Pereira de Figueiredo. in *Filosofia Portuguesa*. <http://cvc.instituto-camoes.pt/filosofia/ihu1>.

② Kenneth Maxwell. *Pombal, Paradox of the Enlightenment*. Cambridge, 1995. pp.13-14.

① 大地震の直後すでに博学的神父として、周囲から彼は震災の記録を託されたわけである。

フィゲイレド著『リスボン地震・大火奉告』（その二）

何人の住民が歿したかを、厳密に述べるのは難しい。一万五千人と算定しても、被害の状況からして過大ではないであろう。七万人が歿したとの主張は、死者の数が壊滅した家屋の数に比例することを考えていない。主要な貴顕では八名が逝去された。ポルトガル駐在スペイン大使ペレラータ伯爵ベルナルド・ロカベッルティ卿、アングェジャ侯爵の息子にして総大司教教会総長フランシス・ノロンハ卿、アントニー・ド・メロ・ド・カストロ、ロク・ソウサ、ルミアシス侯爵夫人アンヌ・ヴァンセンチア・ノロンハとその年長の令嬢ふたり、最初はジョン・エマヌエル・コスタ卿に嫁ぎ、ゴンザルヴス・ザヴェリウス・アルカソヴァス・カルネオと再婚したアンヌ・モスコスおよびその一家二四名以上、最初はルヴィス・シャルル・マシャド・メンドンサ卿に嫁ぎ、ロレンツォ・アルメルタ卿と再婚したイザベラ・カタリーヌ・ヘンリック。(原註四)ペレラータ伯爵は逃れようとする、敷居に届いたとき、家屋が上に崩れ落ち、彼自身と七人の従者を瓦礫で埋めた。ただ、相続人である子息は危く救出された。伯爵はそこから掘り出され、ベネディクト会に属する教会で厳かに埋葬された。

① *Ibid.*, p.97.

重要な行政者のなかでは、バラチナ宮廷の上院議員および王国全体の元老である九十歳歳のフランシス・レヴィス・アクンハ・アタイデが死去した。これに加えて戦争長官ペトロ・メロ・パス・アタイデ、エルヴァ大聖堂教会管長およびリスボン異端審問官エマヌエル・ヴァレジャオン・ド・タヴォーラ、ともに聖なる総大司教教会と国王諮問会議の高位聖職者であるガスバル・ガルヴァオン・カステロフランコならびにエマヌエル・バスコンセロス・ガジョ。最初の危険から逃れたマリア・グラサ・カストロ侯爵夫人は、令嬢と相続人たちの安全を跪いて神に感謝したが、その瞬間崩れ落ちた障壁で無惨にも生き埋めとなり、カスカエスの村落で数日後若くして歿した。

最初の地震で破壊された建造物をつぎに示す。高台の地域ではアルカンタラ・セント・ペテル教会・修道院、サン・ロケ・イエスズ会コレジオの一部と同教会の高塔と正面、フランシスコ会の修道院と豪華な教会。三位一体会の神聖修道院と高塔と豪華な教会。カルメル会の修道院と高塔と豪華な教会。聖餐教会、傷める聖女教会、セント・カレリーナ教会。ブラガンサ公爵、ラフォエンス公爵、ニザ侯爵、ヴァレンシア侯爵、タヴォーラ侯爵、フロメンテラ侯爵、公爵、ヴァラダレス伯爵、アトギア伯爵、ヴィミエイロ伯爵、サンチャゴ伯爵、ロレンゾ伯爵、ジョゼフ・フェイックス・クンハ、ジョゼフ・メネゼス、フェルニナンド・ミランダ、アントニオ・アルヴァレス・クンダ、ヴァンセント・ソウサ、アルカソヴァス卿、等々の宮殿。

アルファマ地区の被害を挙げると、ふたつの古式尖塔をもつサンタ・マリア教会（大聖堂）、サント・アンドレア教会、サン・トマス教会、サン・ジャコビ教会、サン・ステファン教会、サン・ミハエル教会、サン・ペテロ教会、サン・バルトロメウ教会、サン・ヨハネ教会、サン・ジョルジエ教会、サント・アントニオ教会、聖十字架教会。ヨハネ福音書世俗参事会の修道院と教会、アウグスチヌス聖堂参事会の豪華なサン

・ヴィセンテ教会とその修道院（サン・ヴィセンテ・デ・フォラ教会＝修道院）、アウグスチヌス托鉢修道院、慈悲教会、およびその修道院の大半と付設された山岳教会、ドミニカ会の救世主尼僧院、アウグスチヌス会サンタ・モニカ尼僧院、裁判所大法廷である。サン・ジョルジュ城と王国の古文書を蔵する城砦塔（古文書館）も被災したが、そこにおける文書の大半は城砦塔の管理者であるエマヌエル・マイヤの超人的な尽力により防禦された。ほかにヴァル・ドス・レイス伯爵邸、ドス・アルコス伯爵邸、ロウレンセ・アランカステル伯爵邸、エマヌエル・アントニー・メロ伯爵邸、ソウサ伯爵邸、等々。

王都中心部の被害としては、オラトリオ会の建物と教会、カルメル托鉢会コルボ・クリステイ修道院の一部、サン・ドミンゴ教会とその壮麗な修道院、イエスズ会サンタ・アントニオ・コレジオとその高麗な教会の上部、聖フランシスコ会サンタ・アンヌ尼僧院、聖アウグステイヌス托鉢会のボナ・ホラ教会、ふたつのドミニカ会尼僧院、総大司教教会とその高麗な突塔、サン・ジュリアニ教会、サン・ニコラウ教会、聖母マリアを祀る教会三つ以上、病院、枢密院、異端審問所、カスカエス侯爵、アレグレト侯爵、カセロ・メルホール伯爵、ボンテ伯爵、サン・ヴィセンテ伯爵の各豪邸。沿岸部の被害としてはアイルランド・ドミニカ会修道院、慈悲教会、サン・パウロ教会、少女と孤児の養護施設、税関所とこれに隣接する典雅な埠頭、王宮および壮麗な歌劇場、レフェンテ伯爵とウンハオン伯爵の豪邸、先頃アヴェイロ公爵として昇格したグヴェア侯爵の豪邸、聖フランシスコ会サンタ・クララ尼僧院。

王都近郊では聖アウグステイヌス托鉢会の聖母マリア修道院、テイレイラスの聖フランシスコ会修道院、至高なるイエス＝慈愛深きマリア修道院とそれに付設するコンセプション会尼僧院、聖ブリジエッタ会モラヴィア尼僧院、聖アウグスチヌス聖堂参事会セラヌ修道院、聖フランシスコ会カルヴァリ山尼僧院、シトー会オデイヴェラス尼僧院。ほかの地域や市街にも相当の事例があり、第三聖フランシスコ会修道院とその壮麗な教会、アントニウス会の修道院と教会、シトー会ナザレス聖母教会、イエスズ会コトヴィア修練院、ベネディクト会輝ける聖母コレジオを付記したい。丹念に被害を列挙してきたが、これ以上の煩雑さは避け、他の多くの事例は割愛しよう。

被害の軽少な建造物として主要なものを挙げる。聖ベネディクト会の修道院と教会、伝道者聖ヨハネ世俗参事会のサン・ベネディクト修道院・教会、聖ヨハネ神霊修道院・教会、アルカントラ・オラトリオ会の苦悩の館・教会ならびにこれに付属する王子エマヌエルの宮殿、イエスの尊き死を思う館・教会、聖クリストファ＝聖セバスチャンの館・教会、聖フランシスコ会サンタ・アポローナ尼僧院、同じく被害の軽少あるいは皆無な托鉢聖アウグスチヌス会尼僧院、ルドルド伯爵、パヴォリド伯爵、オリオラ伯爵、ヴィラノヴァ伯爵、ロレンス伯爵、アルマダ伯爵、そして偉大な王室狩猟家、フェルディナンド・ダ・シルバ・テレス伯爵の各豪邸、等々。（原註五）

（原註四）リスボンの地震で歿した第一級の貴族を、私は八名と誌したが、さまざまな尼僧院の修道女はこの数値に含まれていない。彼女らについては適切な項目において数えたからである。

（原註五）完全に破壊された教会として聖母受胎新教会、ロレット教会、託身教会、サン・ジュスタ教会をコインブラ書簡の筆者は数えているが、これは誤りである。また、ドミニカ会秘蹟尼僧院、サンタ・アポローニア修道院、フランシスコ会のイエス磔刑尼僧院、さらにはカグヴァル公爵邸、タンコス侯爵邸、

サブゴザ伯爵邸を全壊とするのも誤っている。①

『世界地震通史』の著者モレイラ・デ・メンドンサは、震災の規模を記録したいくつかの文献について算定の粗雑さを批判しながら、フィゲイレド執筆の記録を称讃し、これに依拠したと述べる。②この言及は死者の実数や被害の範囲に係わるものであるが、『世界地震通史』と『リスボンの地震・大火奉告』を照合すれば、救援の活動、犯罪への対処、蔵書の焼尽など多くの項目で、メンドンサがこれなる小冊子から摂取したことは明らかとなる。

プロテスタントに改宗し、イギリスに亡命したオリヴィエラは、『リスボンの地震・大火奉告』はカトリックの教理に覆われていると非難した。小冊子に付記される若干の原註は、問題の核心から外れているが、オリヴィエラへの反論と思われる。大地震のあとポンバルに主導されるポルトガルの王権は、合理主義的な改革とイエスズ会への抑圧を強め、オラトリオ会はこれを援護する有力な宗派であった。

「アントニオ・ペレイラ・デ・フィゲイレドとラモス・デ・アジエヴェドの著述は」マクスウェルは語る。「教権に対する王権の優位を正当化し、精神的な領域と従来みなされていた事柄を司法の領域に組み入れた。」なかでも「フィゲイレドによる一連の書物と書簡がポルトガルにおいてとくに広汎な影響を与えた。彼の『神学試論』

① Antoni Pereira, *op.cit.*, pp.9-13.

② Moreira de Mendonca, *Historia universal dos terremotos*, Lisbon, 1758, pp.139-140.

（リスボン、一七六六年）は最初の二版で一六〇〇部を即刻売り尽くした。」①
『リスボンの地震・大火奉告』を高く評価し、その要点を入念に紹介したケンドリックも、ここではポンバルに主導される緊急政策が過大評価され、多くの宗派や人々の救援活動が軽視されたと言いつける。② ポルトガル人自身による貴重な記録と評価しつつ、そのような小冊子の制約をも私たちは勘案せねばならない。

フィゲイレド著『リスボン地震・大火奉告』（その三）

最初の地震の直後に想像を絶する異常な流水の隆起が発生した。地下の物質が海洋で破壊されたためか、知られざる火で稀薄にされた水が膨張したためか、あるいは大地を揺るがしたのと同じ運動が隣りの海へ伝播したためであろう。そのため実際にカスカイス、セトヴァル、ペニツシュ、およびアルガルヴェスで多数の人々が洪水で溺死し、リスボンでは海流が通常より五ファートルング（約一キロメートル）以上流入して、橋梁が破壊され、障壁が倒壊し、巨木の重い幹が海辺に横倒しにされた。

こうして都市は壊滅し、海が逃げ場を遮ったため、被災した市民の望みは近隣の田園に急ぎ避難するだけとなった。ここであるいは幼な子を腕に抱き、あるいは聖者の像を携えて、大抵はどこへ留まるべきか判

① Maxwell, *op. cit.*, pp.93-94.

② Kendrick, *op.cit.*, pp.71-72, 90-92.

らぬまま、彼らすべてが群れをなした。しかもとりわけ女性にとつて新たな不都合がそこに生じた。数多の瓦礫の山が街路を遮断するため、だれしも前へ進むのが難しいのである。余儀なく両手で瓦礫を除けつつ、あるいは坂を登り、あるいは地を這っていく。ここでは彷徨う聖なる処女が狂うばかりに懊悩し、かしこでは王国の貴婦人が瓦礫の山と遺体の列に踏み入り、世にも怖ろしく陰鬱な光景を呈するのが見られる。裸足の人もあり、下着の人もあって、大抵は埃にまみれ、幽霊のような表情で、髪を乱している。彼女らの若干はこのような様子できわめて險阻で危険な道を三マイルも歩いた。

リスボン大司教区枢機卿ジョゼ・マヌエル・カマラ・デ・アタライアは、居室が崩れかけると、従者に背負われて脱出し、さらに担架でオラトリオ会に属する別荘へ避難したが、六名の従者は死亡した。首都から三キロ隔り、高台の西側にある好適な離宮に、畏くも国王・王妃はそのとき王子ならびに王女とご一緒におられた。宮殿が揺れ始めるや、全員が無事脱出され、遠からぬご料地へ避難された。野営の際に用いる広大な仮設御所をそこに建て、今日まで六ヶ月暮しておられる。堅固な城砦と秀麗な河港で著名なこの村落に、往古偉大な国王エマヌエルは聖ジェローム修道士の壮麗な僧院を創建し、それに因んで住氏はベレムあるいはベツレヘムと呼ぶ。

とはいえ、神の怒りはなお鎮まらず、不幸にもリスボンは新たにもっとも激烈な災厄に襲われ、同じ日市内の各地で火災が発生した。容易に理解できることであるが、かくも多くの住宅や教会が倒壊して、家々では炉辺に、教会では燭台に木材や家具が落下し、当然引火したのである。そして、動揺した人々が恐怖のあまり田園へ逃げ散る間に、火の手は難なく四方八方へと拡がり、富裕な王都リスボン、ヨーロッパ全体の要めを四カ日間で壊滅させた。そこでは個人の住居の半数以上とさらには主要な建物の大半が焼尽したのであ

る。それらに含まれるのは、三位一体会、カルメル会、ポルトガル・アイランド・ドミニカ会、フランシスコ会、アウグスチヌス托鉢会、聖ヨハネ福音書世俗参事会の各修道院と各教会、およびオラトリオ会の聖霊教会と修道院である。さらに王立税関所、総大司教教会、リベイラ王宮と壮大な歌劇場、聖母マリア大寺院（大聖堂）、リスボン大司教の古宮殿、傷める聖女教会、殉教者教会、託身教会。ロレット教会、サン・パウロ教会、サン・ジュナン教会、サン・ジュスタ教会、サンタ・マリア・マグダレン教会。無原罪懐妊新教会、同古教会、慈悲教会、サント・アントニオ教会、サン・クルーズ教会、聖なる秘蹟教会、その他。なおまた、ブラガンツァ公爵一家、ラフォエンス公爵、アヴェイロ公爵の各豪邸、カタヴァル（子）、ロウリサヘルシス侯爵、マラルヴェン（子）侯爵、ヴァレンティア侯爵、フロンテイラ侯爵、タバイラ侯爵、アングラ侯爵、サンチャゴ伯爵、ヴァラダレス伯爵、ヴィメレイオ伯爵、アングリア伯爵、サント・ヴァンセント伯爵、アトウグリア伯爵、ククルム伯爵、等々の各豪邸。

以上に加えて被害として挙げるべきは、あまたの著名な図書館である。手稿類と稀覯本に富む王宮図書館。

（原註六）

ラホエンス公爵、ルリカル侯爵、ヴィミエイロ伯爵の各図書館、ドミニコ会、カルメル会、フランシスコ会の各図書館。さらにはオラトリオ会の図書館であつて、これこそ同会のドミニク・ペレリラ神父が収集達成のため数年の労苦を費やし、恵み深いヨハン五世の愛顧と恩恵にとりわけ支援されて、聖母マリアについて書かれた一切をここに納めたところである。かつまた、多くの記録、武勲、証書、商家の帳簿、洗礼の記帳、葬儀や系譜を挙げてよく、これらなしには財産も算定できず、相続の権利も裁定できない。

莫大な量の金銀等、膨大な数の高価な絵画、首飾り、真珠、グイヤモンドなどの宝石も同様である。（原註七）換言すれば、全市における豪奢で貴重なものすべてが、燃えさかる火焔でほとんど焼失したか、破壊さ

れたのである。

最初の一晩を住民の大半は戸外で眠れずに過した。なぜなら、地震が次々と繰り返され、全市が炎と煙に曝されるため、まったく休めないからである。ふと眠りに襲われても、周りの群衆の叫び、神の慈悲と聖者の仲立を求める叫びで、すぐに起されてしまう。かくも稠密で富裕な王都、壮大で豪華な都市の住民が、極度の悲惨と欠乏に陥って、容赦のない天候から身を護るため、毛布や敷布で造られた小さなテントに当初逃れ、のちには木造りの小屋に頼ることを、だれが予想したのであろう。ここではいかなる種類の食物も得難く、乾いたパンしか持たぬ者すらみずからを豊かで幸せと思う。慈愛深き君主の格別の配慮と寛仁がなければ、多くの人々が飢餓で歿し、病気で死ぬ者はそれ以上に達したのであろう。陛下は病める人には医薬を、無事な人には食糧を配され、修道女に適切な居所も定められた。また、壊された僧院を修復させ、傾いた建物を安定させるため、材料や費用を負担された。徳高く寛仁な君主を模範としてこれに続いたのは、国王ご一家の王子および王女、総大司教枢機卿、リベイラ伯爵とルロンド伯爵、そのほか多数の貴顕や民間人である。今次傑出した宗教団体は聖アウグスチヌス聖堂参事会、ベネチクト会、聖パウロ隠者庵、ミニム会、イエズス会、オラトリオ会などである。被災した都市でこれらの団体が行った個々の活動、なかでもミニム会による死者四八〇名の埋葬、さらには本稿でさき言及した活動に陛下は謝意を表され、記録に留められた。

叡智を發揮されて国王は民衆の安全のため数々の法令を制定された。なかでも重要な王命は貴顕と行政者はなにびともリスボンを離れてはならず、物価は従来のままに留めることである。また、首都から脱出した者を呼び戻したり、必要な場合労働者や職人を強制的に雇うため、王国のすべての地域へ係員が派遣された。国王の部隊を強化するため、大勢の兵士がエクストレマツラやアレムテジョなど、さまざまな町からリス

ボンに来るよう命じられ、閣僚や廷臣を補佐して遺体を埋め、街路や街道を整備し、神聖な場をも世俗的な場をも警備する役目を担った。というのは、市中に沢山の盗賊や悪党が横行し、どの家でも盗難の危険があり、どの教会でも聖器盗難の恐れがある。なかには残忍で貪欲な輩もいて、遺体すら見逃さず、男性から刀剣、時計、締め金を、女性から扇子、指輪、宝石をそこから剥ぎ取った。

遅滞なく峻厳にこうした犯罪者を処分する勅令を国王陛下が発せられた。その結果数日のうちに三四名が絞首刑に処せられた。内訳はポルトガル人十一名、スペイン人十名、アイルランド人五名、サヴォワ人三名、フランス人一名、ポランド人一名、フランス人一名、ムーア人一名である。こうした措置の主導を委ねられたのは、国王の従弟にあたるポルトガル最高の貴族、ロフォエンス侯爵ペドロ・ド・ブランガンサ・ソウサ・タヴァレス・シルヴァ・マスカレンハスにほかならぬ。国家の安全が危機に瀕した事態で、この方はとりわけ積極的かつ精力的であり、極度の労苦のなか、寝食もままならぬなかで、多大の勇氣と思慮を發揮され、きわめて温厚で忍耐強い態度を保持された。

この間良き牧者の責務を総大司教枢機卿は担われた。すなわち、宗教的な儀式を行うべく様々な場所に小屋を建てるよう指図され、いかなる告白をも聴聞できる権限をすべての聖職者に与え、聖母マリアを讃える国家的な断食を数日間命じ、神の怒りを鎮めるため、公私にわたり祈禱を捧げるべく配慮したのである。こうした目的のため十一月十六日日曜日に悩める聖女教会へ全都を挙げて祈禱行列が営まれ、生き残った者の生存を神に感謝した。この儀式には国王陛下もご一家全員とともに臨席された。また、聖母マリアの加護祭において国家的な断食を実施し、毎年同じ行事を繰り返すことが、公の誓いとして定められた。

さらに十二月十三日金曜日にはばすすべての宗教的品級を網羅し、あまたの貴顕の参加を伴う聖職者集団が、

(サン・ロケ教会) サント・ヨアヒム礼拝堂へ集った。そこから前述の悩める聖女教会へかけて緩やかな進がなされ、素足のまま大地を凝視して、神の慈悲と聖者の調停を声高に哀願し、とりわけ敬虔で感動的な光景を繰り上げた。この祈禱行列の先頭としてラセデモン大司教かつリスボン司教座司教総代理のジョゼフ・グンタス・バルボサが素足で歩まれた。このあと同じく謙抑かつ敬虔に、黒衣を纏う貴顕、宗教的各品級、長老・高位聖職者・聖堂参事会員の総大司教座三位階が続かれた。悩める聖女教会での祈禱が終ると、オラトリオ会の神父が参詣者の脚を温水で洗い、タオルで拭く。ローマ教皇大使フィリップ・アシアオフスの範に倣い、彼らはこうした行為によってキリスト教の人間愛と献身を示すのである。儀式の刷新が先頃の災厄の記憶を新たにし、頬に涙を溢れさせる。かくも敬虔で恩愛ある光景は、どれほど無情な者でも深い感動なしに眺めることはできない。

リスボンにおける最近の地震と火災に関して、私が語るべき詳細は以上のとおりであって、これらの大半を占めるのは、敢て市内のあらゆる箇所自身が見詰めたことか、悲惨な場面の目撃者から聴取したことである。

(原註六) こうした蔵書のうち私が精読し、通常の版本と照合したのは、ヴェネチアで一四六九年と一四七二年に印行されたビリニウス(兄)、一四六九年に印行されたコルネリウス・タキトゥス、一四七〇年に印行されたリヴィウスである。タキトゥスとリヴィウスは一四七二年ヴェネチアで、また一五〇四年ボロナでも印行された。そのほか一四七七年ヴェネチアで、一五一〇年ボロナで、また一五二一年ストラスブールで印行されたアウルス・ゲリウス、一四七二年アダム・アンベルガウによって、一四九九年ミラノで、一五三七年ヴェネチアで、また一四七二年ペテル・ヴィ

クトリウスによってローマで印行されたキケロ。これらのほか同じ時代にさまざまな土地で印行されたシリウス・イタリクス、マルシアレム、ホメロス。さらに一四六〇年メンツでヨハン・ゲヌアによって印行された羅仏英辞典と一四六二年メンツ印行の通俗版聖書を挙げておく。

(原註七) これら貴重な品々を数多く失った犠牲者は、ラフォエンス侯爵、アヴェイロ公爵、マリアーヴァ侯爵、ヴァレンシア侯爵、タヴォラ侯爵、キュクリム伯爵、アトグイア伯爵、アヴェイラス伯爵、サンチアゴ伯爵である。①

『リスボン地震・大火奉告』はなかば公的な文書として総括的・一般的な記録であり、フィゲイレドの個人的な被災体験は綴られていない。しかし、オラトリオ会の充実した独自の図書館や高徳な神父フィツリブ・ネリについては比較的詳しい記述がなされ、そこには執筆者の切々たる想いが感じられる。

このちフィゲイレドは『ポルトガル政事日誌―リスボン大地震からイエズズ会追放まで』を執筆し、一七六一一年にラテン語版を、またポルトガル語・イタリア語の対訳版を一七六二年にロンドンで刊行する。この著書で彼は震災への緊急政策など宰相ポルトの功績を称讃し、イエズズ会の教理と所業を批判した。

こうしてポルトバル政権への援護とともに、フィゲイレドは旺盛な著述活動を続け、一七五九年には修辭学に関する『詩文提要』を、神学の分野では一七六五年刊行の『宗教史原理』など九冊の著書を、さらに一七七八年か

らはポルトガル語への訳出による新約聖書六巻と旧約聖書一七巻を上梓した。① なお筆者が検索したかぎり、
フィゲイレドの著作一覧にはこれら大地震に関する著作が記載されていない。

初出 二〇一三年十一月二一日

更新 二〇二一年八月五日

① Antonio Pereira de Figueiredo. in *Filosofia portuguesa on-line* and in Wikipedia.